

手紙からみたシュワイ ツァー

— 邦訳『書簡集』を読む —

まえおき

この程 H・W ベール編『アルベルト・シュワイ ツァー書簡集』が刊行された。314 通の手紙が邦訳、収録されている。翻訳がすぐれていることに加えて、懇切丁寧な注が多く付され、はなはだ読みやすい。野村実先生がその「日本語版によせて」に言っておられるように、「シュワイ ツァーその人、その人間性を知るうえで、書簡にまさるものはない。」 シュワイ ツァー自身も「ホフマンスタールを手紙によってよりよく知ることは、教えられるところがあります」と書いている（234、訳書における書簡番号、以下同じ）。シュワイ ツァーに学ぼうとする者にとって、実に貴重な出版である。

人は誰も自分の世界をつくる。とくに偉大と言われる人ほど、その世界は堅固で明確である。3百通余のこれらの手紙は、おのずからシュアイツァーの世界を堅固に明確に刻みあげている。その世界をもし一語で言うとなれば、「人と人との関係の世界」であろう。それは彼自身の言う「ひかえめの法律は、心情の権利によって打ちやぶられ、われわれはみな無縁の状態から抜け出して、人と人との関係にはいるようになる」（『生い立ちの記』）、その世界である。そこには、多くの有名人、名士ばかりか、「名もない学生、病者、親しい家族に至るまで名をつらね、まことに受信者の多彩さに読者は一驚する」（野村）のである。

友情の人シュワイ ツァー

シュワイ ツァーはその多彩な読者の「誰、彼を問わず、すべてに誠実、友情の限りを示している。」（野村）人から「友情の億万長者」と評された彼は、自ら「……ときどき自分に尋ねるのですよ、どうしてきみがぼくの生涯に現われ、こんなに友人となり、こんなに助けてくれたのかと！」(193)と、友情を賛嘆する。妻ヘレーネにはもちろんのことだが（彼女との往復書簡集もあると聞く）、例えば、多感な十代後半にミュールーズの大叔父ルイ家で同宿であった高校教師には、その後も「敬愛する先生」と言ってしばしば便りを書いている(2)。妻を失った友に「わたしがどんなに心からきみの悲し

みを分かち合っているか」(190) と同情を寄せ、同僚の誕生日に祝いの言葉を書き送ることを忘れない(256)。そして人生の後輩に「与えられる友人関係は避けないように。学生時代からの友情は人生の宝だから」(82) と勧め、彼の名を付した高校の生徒たちにも「皆さんも友情を重んじることを願ってやみません。友情は貴重な財産です」(200) と教えている。

友情はひとりで生まれ、自然に育つというものではない。不断の心配りがあって初めて育まれていく。シュワイツァーの手紙を読むと、友人に対する賛意、敬意の表現(compliment) が実に多い。マルティン・ウェルナーの『カール・バルトとシュワイツァーにおける世界観の問題』(60) とハンス・プフィツナーのカンタータ『ドイツ人の魂について』(80) に対する賛辞、マルティン・ブーバーの著書(102)、アルテユール・オネゲルの楽譜(103) に対する謝辞、マックス・プランク(155) とヘルマン・ヘッセ(157) に対するゲーテ賞受賞への祝意、レーガー協会の名誉会員に推された折のマックス・レーガー未亡人エルザに宛てた謝意(159)、パブロ・カサルス¹の国連総会における演奏会の計画に対する賛成のことばなど、いずれも率直で心のこもった応答である。そしてロマン・ロランには「あなたの書いておられるものを時々読んでいることをただお伝えするために、この手紙をしたためました」(30、傍点筆者) と書き、バートランド・ラッセルには彼の核兵器反対の抗議行動を支持して、「この不屈の思想家(アインシュタイン) のもっとも重要な一人としてあなたが、親しい友よ、戦いを始めて下さった」(273) と激励している。ナチス弾圧下にあるユダヤ人の友に、あなたの状況が必要とする場合には、いつでも、どのようにでも当てにしてお下さって結構です。……ときには自明のことを言うことが、役に立ちます」(134) という本当の親切。ダグ・ハマーショルドに「心の中ではいつもあなたに挨拶を送ってきました」(199) という率直な表白。彼は友情の人というより、むしろ友情を作り出す人であったと言えるべきだろう。

友情とは何か。ジャワハラル・ネルーに宛てた手紙の結びに述べられた次の言葉は、シュワイツァーの友情観として最も適切なものであろう。「ネルーさん、わたしたちは再会できるとは思われませんが。しかしわたしたちはお互いに思い出し、お互いを理解しています。なぜならわたしたちは、わたしたちを必要とし、わたしたちの運命となっている果すべき課題がありますから。」(185)

実践家シュワイツァー

シュワイツァーの手紙の読者は、彼が思想家というより、むしろすぐれて実践家であったことを認めざるをえない。

第2次ラムバレネ滞在にあたって（1924年）、彼がストラスブールの友人たちに宛てた手紙（59）などはその代表的なものであろう。彼はそこで「皆さん、いま重要な仕事があります」と呼びかけ、必要品をアフリカへ運ぶ方法（船荷証券や税関申告の明細書を用意せよ）や、包装の仕方（値段が高くついても束より木箱がよい、木箱は5、6人で運べる程度の重さであること）などを克明に指示している。訳者の付した注によれば、「シュワイツァーはこのような注文と運送のための手紙をたくさん書いた。」（91など）

シュワイツァーはまた金銭のことでもはなはだ实际的である。ものを注文するときには必ず支払いの方法を確認し（59, 275）、ラムバレネに来る人にはどれ位の金をどのようにして持ってくればよいのかを教え（70）、自著の印税についてその税金との関係に至るまで配慮し（225）、病院の経営者として為替相場にも注意している（95）。金銭については無頓着（であるべき）という日本人の偉人観からは遠いが、この「偉人」は実に「細心な」実践家であった。

その内容は別にしても、シュワイツァーの手紙は全体として生活的、具体的、实际的で、そこに彼の手紙の魅力の秘密があると言ってよいだろう。それは決して彼の思想の深刻さと矛盾するものではない。

実践家としてのシュワイツァーについて、幼い時からシュワイツァーのように生きることを志し、彼のラムバレネであったネパールにおける医療協力にその一生を捧げて、この8月8日に永眠された伊藤邦幸氏の次の言葉を引いて、同氏への追悼とすることをお許しいただきたい。「私がネパールの山奥におります間に、シュワイツァーを憶うたびに、思い返されることが一つございました。それは——人間は他人の評価に生きてはならない。他人の思想を批評することよりも、むしろ批判に耐えうる行為の人として存在すること。そして遂には行為において、思想をも審く者たるべきこと。——これすべての実践家に負わされたるの義務であるという思いであります。」（「シュワイツァーから学んだこと」『シュワイツァー研究』第6号、19ページ）



「生命への畏敬」

シュワイツァーに「生命への畏敬」ということばがひらめいたのは、1915年のことであった。それから永眠の65年まで、ちょうど半世紀の間、彼はただこの一語をめぐって思索し、ただこの一語に向かって生きた。驚くべき集中と言わねばならない。

当然のことながら、「生命への畏敬」は彼の手紙でも重要な話題である。もちろんその性質上詳細な議論があるわけではない。ここではその主題が出ている手紙を大雑把に三群に分けてみる。

第一群は「生命への畏敬」がかなり直接にキリスト教と結びつけられているものである。「ときどきわたしの生命への畏敬という教えのうちにイエスの愛の倫理に対する哲学的表現を見出したこと、従って深く徹する真の思考によって人々はイエスに至る道に導かれる、と言い表わせることに深く感動しています。」(84。88と96にも同じ趣意が述べられている。)そしてハンガリーの一カトリック司祭に「生命への畏敬の理念は、わたしたちの主イエスの愛の教えのひと枝に咲いたおそ咲きの花です」(262)と書き送っている。

第二群は、「生命への畏敬」は全生命をその対象とする、と主張するものである。「倫理とは従来考えられていたよりもはるかに広汎なものであり、より深い根源を必要とするという認識がわたしの念頭に浮かんだことをわたしはつねに義務を伴った特権と感じてきました。」(232)「もし倫理がその根本形態において、われわれが他の人々に負っている自発的な畏敬であるならば、それが人間のみに関わるとは考えられない。倫理はその本質上すべての生けるものに向かってゆく。」(286)「そうです、友よ、誓って申し上げますが、わたしは生命に客観的に妥当する価値の区別を承認しません。どの生命も神聖です！」(97)

しかし、この世は生命の自己分裂の恐るべき舞台である。人間も他の生命を犠牲にして生きなければならない。倫理的な存在として、人間はこの必然性の中でいかに生きるべきか。(『わが生活と思想より』)この問題に対する解答ともいえるべき一通がある(181)。シュワイツァーは、ラムバレネ病院での具体例を述べて、「個々の場合の決定はめいめいの事です。しかしわたしには、(運ばれてきた)餓死したかも知れない四羽のペリカンを殺すか、(ペリカンの餌として)魚を殺すかの選択しかありません。……わたしが一をとり他をすてる決心を正しくしているかどうか、わたしには分かりません」と言っている。

第三群は、「生命への畏敬」を普遍的な倫理、「世界哲学」(296)と考えようとするものである。「倫理的なものに対する最も普遍的な表現としては、やはり生命への畏敬 と言うほかはない。」(69)「わたしは永年にわたってインドと精神的に結ばれており、生命への畏敬の理念によって西洋と東洋が互いに展望豊かな精神的結びつきに到達した、というすばらしい経験をゆるされています。」(274)「なぜなら生命への畏敬によってわれわれは宇宙に対する精神的関係に入るから、ということがはっきり分かったのです。」(267)

「もし人類が残酷な兵器をもってする戦争で亡ぶべきでないならば、倫理的な、生命への畏敬のみなざる文化が起こって来なければなりません。」(240)

付言すれば、この書簡集に関する限り、全体として第二、第三群は生涯の後半に多い。換言すると、「生命への畏敬」の理念とキリスト教の関係は、彼の晩年に至る程稀薄になっていると言える。



シュワイツァーは、「生命への畏敬によって世界の人々が精神的に結ばれるという理念は、わたしのすべての著述と事業の眼目です」(238)

と言いながらも、それは彼の死後長い年月を経てやっと認められることであろうと信じていたから(175)、

「生命への畏敬の倫理が承認されつつあると知るとは、わたしのこの老齢にともなう難儀な生活のなかで、

わたしをしゃんとさせて喜びを与えてくれます」(232)と喜んでいる。しかし彼の死後四半世紀、生命への畏敬の倫理の普遍性はどこまで理解され、実行されているであろうか。

シュワイツァーの信仰

人はしばしば簡単に他人の信仰を批評する(その有無とか、正誤とかを)。しかし信仰の批判ほど難しいものはない。信仰は見えないから、ただその描き出す軌跡からのみ、辛うじてその一端を知ることができるだけである。ましてシュワイツァーのように、「自らの宗教的感情に関する発言にはとても控え目」(96)な人にあっては。

その彼も、彼がアフリカに行った理由はイエスの精神に命じられたからであり、『イエス伝研究史』の結論が彼の信仰告白であると明言している(64、96)。「ここ(ラムバレネ)で暮らし、ここで働きながら、わたしは自分がイエスに命じられた者であり、イエスに仕えようとする者であると思います。……ところでこれは大きな神秘です。イエスの精神は命じ、わたしたちは従わねばなりません。それは使徒パウロの教えの根本理念だと思っています。イエスはわたしたちの人生の主であり、わたしたちの主であります。」(64)そして、イエスに仕える道はいろいろあるが、最も困難なイエスへの奉仕は「断念すること、苦しみを受けることにおいて」である、「それゆえ、眼を見開いて、イエスによって定められた目立たない奉仕を見出して下さい」と青少年に勧めている(119)。

「わたしたちは、何事も真理に逆らってはできませんが、真理のためならばできます」(第2コリント13・8)はシュワイツァーの特愛聖句と聞くが、この書簡集では彼はフィリピ4・7の「すべての理性にまさる神の平和があなた方の心とあなた方の思いをキリスト・イエスにあって守って下さるでしょう」を一再ならず引いて(174、119、202注(2))、これまた彼の特愛であることを示している。その他「山上の説教」に対する言及が多いこと(248、281など)、教会の礼拝にもっと聖書の朗読を入れるべきだと考えていること(292)、とくに次の言葉は注目に値しよう。「わたしたちの信仰は、わたしたちと死別した人々の魂が平和と光の国へ入り、神のもとにあると信じることです。このことをわたしたちは安んじて待つことが許されています。」(229)

それではシュワイツァーのキリスト教はどのようなものか、という問に対して、さらに手紙の中から以下の文章を引くことにしたい。「イエスの終末論的認識は敬虔なものだ、なぜならそれによってわたしたちはイエスのあるがままを、彼の敬虔を、知らされたのだから。」(263)「あなたの文章をくりかえし読んで、キリスト教とイエスの人格を内面的にとらえていることをうれしく思いました。あなたがキリスト教を主イエスおよび神に対する内面的な態度としてとらえていることはまちがっていません。すべての外面化はキリスト教にとって障害です。これに対しすべて内面的なキリスト教は活動的で、人々の心をとらえます。」(281)「わたしの意見では、すべての宗教的哲学的思考によって人間が心動かされて、自分自身のことをよく考え、真のほんとに深い精神性と人間性に到達する必要を体験しなければならぬと思います。……ユダヤ教もキリスト教も互いにきわめて深い人間性の理想を共有しています。……現代の大問題はわれわれが真に人間的となることだと考えている

すべての人々は一体を成しています。」(272)

シュワイツァーは、クリスト教会の合同にも深い関心を示し、その実現は「クリストの御霊をもととする努力」(226)「イエスの精神ですべてにおいて平和を追い求める努力」(297)によると主張している。また伝道事業について「わたしは伝道と人道的な事業は国際的な性格を保持すべしとの考えに賛成」(45)と言っていることも興味ふかい。

以上読んできて率直に感ずることは、多くの批判にもかかわらず（彼の神学には贖罪論がない、など）、シュワイツァーの信仰は私どもが考えている以上に、敬虔で正統的だということである。神学者はいざ知らず、私のような一平信徒にとっては、彼のイエスに対する徹底的服従と、その「内面的なクリスト教」(281)と、「宗教と思考は、愛によって神に帰属する神秘主義において出会います」(96)という健全な宗教性があれば、それで十分にキリスト教であると思われるのである。

シュワイツァーの人間性

シュワイツァーは、ある時自らの絵をかく能力に見切りをつけて以来絵をかくことはなかった、と聞いた。では文学の能力はどうか。ラーゲルフェルト男爵夫妻は、スウェーデンにラムバレネ病院を設立、グレタ夫人はシュワイツァーのスウェーデン語訳者だが(49注(2))、この夫妻に宛てた手紙が本書に5通掲載されている。そのうち3通は棕梠の日曜日が発信日である。ラムバレネはその頃が一番美しいのか、シュワイツァーは「静かな湖」へ出かけて彼らに手紙を書いている。「わたしは一人で木の根っこに坐り、棕梠の日曜日を祝っています。…わたしはあのエルサレム入りを思い浮かべます。木々では鳥たちが耳慣れぬメロディをうたっています。大きなアリがわたしの体にうろついています。——ああ、すべては何と静かなことでしょうか。感動的なまでに静かです。——人間の騒音によってまったく妨げられることなく、あの力強くも悲劇的なホザンナがこの静寂の中に入り込み、時間の中から永遠の中へと入ってゆきます。なぜならここにはけっして歴史は存在しないでしょう。なぜならこの湖は、日光と木立、昆虫たちと鳥、湖に映る雲のものなのですから。「今わたしは書くのをやめ、棕梠の日曜日の想いのうちに、愛する忠実な友だちであるあなたがたお二人のことを考えています。」(62)

この種類の文章は、シュワイツァーとしては珍しいと言うべきであろうが、

もし文学性を豊かな感受性と言うならば、ここには彼の溢れるばかりの文学性が現われている。そして文学性とはすなわち人間性である。彼は確かに「人間性の偉人」であった。

「忠実な、そして悲しげな アルベルト・シュワイツァー」(74)。これは恐らく本書で唯一の「敬具」である。意見の相違を告げなければならなかった手紙の末尾である。自らを「悲しげな」と言い得る人の心はどれほど柔らかく、その魂はどれほど繊細なのであろう。巻末の略年譜によると、シュワイツァーはつごう14回ラムバレネに滞在している。それは年をとるにつれ苛酷なものになっていったに違いない。もう老年というべき年に彼はジョージ・シーバーに書き送っている。「しかしもし一日でも暇な日にとれて、それこそたっぷり眠れたり、本の仕上げに完全に集中できたら、音楽にふけり、暇をかけてオルガンを弾いたり、散歩したり、夢をみたり、休養のためののみ本をよんだりできたら、と思います。いつそんな日が来るでしょうか。ほんとに来るでしょうか。」(154)また『ベリー叔父さん』の著者、姪のスザンヌ・オスワルトには「いつギュンスバッハで休むことができようか。それというのもぼくには、いつか休暇がとれて、ひとりでありたい、自分のために生きたいという郷愁があるから。毎日20人の食卓で食事すること、賑やかな会話を聞いたり相手をしたりすること、人々が不機嫌なときに元気を示すこと…だがしかし病気が治って立ち去る哀れな患者たちをみると、ぼくは自分の運命と和解している。」(140)これらの文章を読むとき思い浮かぶのは、独りオルガンに向かってバッハを弾くシュワイツァーの姿である。それは「悲しげなし姿である。「隠れたところにおられる方」(マタイ6・6)を知るゆえに、「控え目」にならざるをえない人間が、決意して、「人と人との関係の世界」に入っていくときの「悲しげな」姿と言うべきか。ここに人間性の極致がある。

この書簡集でただひとり匿名の受信者は、ラインラントのある身体障害の女性である(202)。この手紙について野村先生は、「弱者への配慮のこまやかさは、かれの深い人間性を語っている」と書き、そこから次の勧めのことばを引いておられる。「あなたは外なる人としては苦しんでいますが、内なる人としては苦難の中で平安に達し、また人々を平安にみちびくことができます。…ただ一つのことを、つまり内なる人間の成長を求めて、あなたがすべての理性よりも高い平和に達し、その平和の精神をいくらかでも人々に与えて下さい。」シュワイツァーはまた、ある青年の母親に「彼(子息)がいつ

までも健康かつ有能で、しかも優しい心の持ち主でありますように…そして内面的な人間に成長されますように」(137)と祈り、自分の著書を送呈してきた人への礼状の中に、「人間の使命は日ごとに、より人間的になることである」(303)という言葉を書き記している。(各傍点筆者)

1960年10月、当時の東ドイツ赤十字社のシュワイツァー委員会委員長に宛てた贈物への礼状(257)の中に、次の一節がある。「新米の医者では、たとえ必要な知識をもち合わせても、病院の運営はできません。それには権威が必要で、わたしはそれを得るのにアフリカで長い年月がかかりました。」私はここでシュワイツァーが、「権威の必要性」を語っていることに注意を惹かれた。権威はもちろん権力のことではない。権威の根源はシュワイツァー一流に言えば、「哀れな疲れた人間のわたしが人々に何かお役に立つなどは、まったく意識しておりません…わたしはただ一つだけ実行しています。つまり「多くを与えられている人は、多くを要求される…」という言葉です」(49)ということばに示されるように、「多く与えられ、多く任された者」すなわち特権をもつ者は、「多く求められ、更に多く要求される」(ルカ12・48b)すなわちそれだけ責任がある、ということである。特権に伴う責任にこそ、権威の根源はあるのである。この考え方は『生い立ちの記』の次の言葉と同じであろう。「人生において多くの美しいものを手に入れた者は、そのかわりにやはり多くのものを提供しなければならない。自分の苦悩をまぬかれた者は、他人の苦悩をかるくしてやる責務を感じべきである。」

シュワイツァーがアフリカへ行ったのは、一つにはヨーロッパ人がアフリカ人にもたらした苦悩に対する贖罪意識と、もう一つはこの *noblesse oblige* (特権は責任を伴う) という意識からであったと思われる。この意識はヨーロッパ人のもつ最も良いものの一つで、シュワイツァーはその意味でも代表的なヨーロッパ人だろう。もちろんこれは一種の貴族主義でもあるから、墮落すれば権威は権威主義となり、権力と成り果てる。シュワイツァーにその萌芽を見て批判する人も出たが、その批判の浅薄さからすると、それは彼にはあてはまらないように思われる。

最後に、シュワイツァーの核武装反対の意志表示である書簡として、231 ウェルナー・ハイゼンベルグ宛、239 野村実宛、271 ジョン・F・ケネディ宛、273 バートランド・ラッセル宛、などを挙げておく。神学者ティエリケに宛てた手紙には、核兵器反対に合わせ広く平和について、「わたしたちはまず武器や核兵器をあてにしない、より深い人間にならねばならない」と

言っている。なおシュワイツァーは、ヨーロッパ議会法律問題事務局からのノーベル賞受賞者に対するアンケートに答えて（1964年10月）、死刑に反対している。「わたしは死刑には反対です。われわれには人間を殺す権利はありません。われわれには人間から自由をうばう権利だけがあります、もし彼が人間社会にとって危険であるなら。」(298)これは同じく死刑反対の私にはうれしいことである（武藤陽一「いのちの問題としての死刑（制度）」『ランバレネ』105号。序でながら、最近の三井明先生の卓論「死刑について考える」同125号を参照）。

むすび

今からちょうど70年前に、シュワイツァーは神学者アードルフ・ハルナックにこう書き送った。「わたしは現在の世界の混沌をよく思い浮かべます。ときには力を奮い起こして、絶望的な思案から立ち上がって労働に赴かねばなりません。あなたも同じ様な御心境でしょう。…恐ろしいのは、いつも最も不都合な経済的措置が取られることです。絶対的自由だけが役立ち得るような場合に、強制が制度化されます。これは悲劇的です。」(51)

激動の時代と言われる現代だが、シュワイツァーのこの先見的洞察から何程の隔たりがあるだろうか。「じつに人々は（今なお）人間性のあらゆる理想に背を向けている」(105)のではないだろうか。

しかし、シュワイツァーの「生命への畏敬」は世界肯定の倫理であり、それは必ずや「人類の運命ととりくむでしょう。瞑想と行動がたがいに人類を正しい道へみちびくでしょう。」(296) 永眠の半年程前、シュワイツァーはパブロ・カサルスに書き送った。「親しい友よ、ぼくはよくきみのことを思い出す。ぼくの思うようには手紙が書けないでいる。しかしぼくは、90歳でもなおも健康を保ち、自分の仕事ができることを特権とみなさざるを得ない。」(305、1965年2月12日付)

(1993年8月15日記)

(所載)

『ランバレネ』第127号

シュワイツァー日本友の会

1993 年 12 月